

太平洋戦争を通しての日米のものの考え方の一考察

平松良行

【抄録】 戦後50年ということで、太平洋戦争に関する各種出版物の刊行が盛んになっている。戦争の反省ももちろん大切であるが、感情的基準で判断するのではなく、冷静に一つ一つの事実に基づいて評価をすべき時に来ている。ここでは従来行われてきた文学とか言語ではなく戦争を通して日米のものの考え方の一部でも探れたらと思う。限られた条件の中で最大限の効果を追求しなければならない軍事面には自ずから民族性が出てくると思われるからである。

【キーワード】 攻撃・防御・マンパワー・人間性・科学力

1. はじめに

英語教員になって20年が経過し、英語を母国語とする国民について関心を抱くようになった。戦時中、父は一兵卒として中国戦線で、間接的ではあるが、米軍と戦い、母親も造兵廠で働いていた。また、10年前にオレゴン州でホームステイさせていただいたご家庭のご主人の父上もフィリピン戦に従軍されたことをお伺いして、この戦争に一層関心をもつようになった。太平洋戦争といっても多岐にわたりすべてにわたって考察することは不可能であるので、とりあえず兵器と作戦の一部をとりあげることにする。

2. ハードウェアの面から

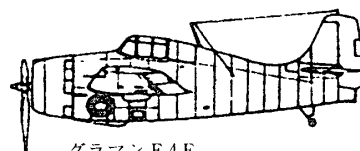
陸・海・空のそれぞれを検証すべきであるが、陸軍の装備、とくに戦車はノモンハン事件の時にソ連軍に徹底的に撃破されたにもかかわらずその後何ら進歩改良が見られず、あいかわらず「フリキのオモチャ」的存在であったので、米国のそれとは比較にならないので割愛する。したがってここでは日米の海軍の装備を比較することになる。

a. その1—航空機

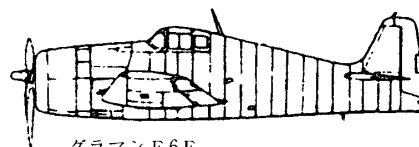
まず、日米の海軍を代表する戦闘機として零式艦上戦闘機（以降、零戦とする）とグラマンのワイルドキャット（F4F）とヘルキャット（F6F）を比較する。巷では零戦が圧倒的に優位であったとなっているが、その性能を比べてみると

	零 戦	F 4 F	F 6 F
馬 力	1,130 馬力	1,200 馬力	2,000 馬力
速 度	565km/h	515km/h	605km/h
武 装	20mm ×2 7.7mm ×2	12.7mm ×4	12.7mm ×6

上記のようになるが、零戦の性能は後期の52型のものであり、初期の21型では950馬力 533km/hである。



グラマン F4F
ワイルドキャット艦上戦闘機

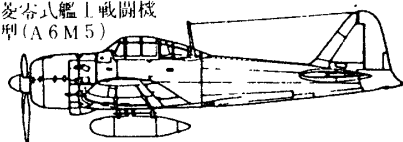


グラマン F6F
ヘルキャット艦上戦闘機

緒戦では零戦がグラマン F4F を圧倒し、中盤からは F6F と対等あるいはやや不利ということであるが F6F は防弾装備が十分になされ、零戦の 7.7mm 機銃ではなかなか撃墜できなかった。20mm 機関砲では弾丸の直進性に問題があつてうまく命中させることが困難であったとのこと。逆に防弾装置のなかった零戦はグラマンの 12.7mm で十分に落とせたとはいえない。

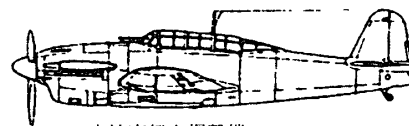
さらに零戦も F6F も空母搭載用の艦上戦闘機であるので、コンパクトに格納庫に収納できなければならない。零戦が主翼の両端を 50cm しか折り畳むことができないのに対し、F6F は主翼を胴体に密着させる

・零式艦上戦闘機
52型 (A6M5)

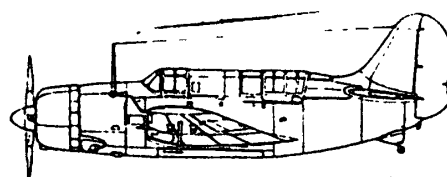


ようにも折り畳むことができ、一回り大きな機体であるにもかかわらず、収納時には零戦よりコンパクトになっている。また頑丈な機体であるので、空母の甲板に露天係留ができ、これが米空母の搭載機数を増加させることになった。(日本の空母の約1.5倍) 航続力と旋回性能で零戦が勝るものの、全体ではグラマン (F6F はもちろん F4F でも) が優勢であると言える。特に防弾装置が優秀なことは撃墜される確率も低くなり、搭乗員も保護できるので一石二鳥の効果を生んでいる。零戦の方は機体、パイロットともに損耗率が高くその後の戦局に大きく影響していく。

	彗星	ヘルダイバー
馬力	1,400HP	1,700HP
速度	580km/h	467km/h
武装	7.7mm×3	12.7mm×1 20mm×2



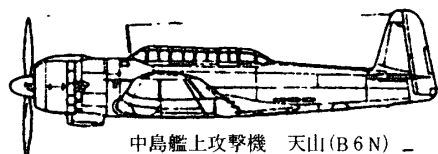
空技廠艦上爆撃機
彗星12型 (D4Y2)



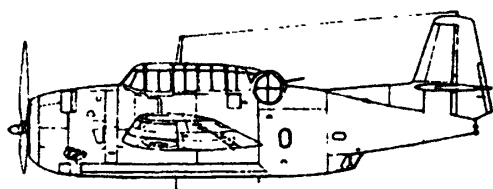
カーチス SB2C ヘルダイバー艦上爆撃機

次に、艦上攻撃機の代表である、大戦中盤以降登場の天山とグラマン・アヴェンジャーを取り上げてみる

	天山	アヴェンジャー
馬力	1,850HP	1,900HP
速度	492km/h	430km/h
武装	7.7mm×2	12.7mm×3



中島艦上攻撃機 天山 (B6N)



グラマン TBF アベンジャー艦上攻撃機

上記「天山」はその前の97式艦上攻撃機に比べて馬力で2倍近く、また総重量でも1.1トンほど増加して (4.6t→5.7t) かなり大型化しているが、それでも武装は7.7mm機銃が1挺増加しただけである。これでは防弾装置の充実している米軍機 (F6F) には全く無力であり改善がなされているとは言いがたい。アヴェンジャーが速度を犠牲にしてでも搭乗員を守ることには心をくだいたのに対し「天山」はそれを速度の方に振り向け攻撃一点張りの姿勢をつらぬいている。

航空機の最後に、こちらも大戦中期以降に実戦配備された「彗星」艦上爆撃機とカーチス・ヘルダイバー艦上爆撃機を取り上げてみると、

となるが、後部から襲ってくる敵機から自分を守るのは、後部座席にある、7.7mm機銃 (彗星) と12.7mm機銃 (ヘルダイバー) で両者の優劣の差は歴然としている。「彗星」の前任機である「99式艦上爆撃機」にしても、そのライバルのダグラス・ドントレスと比べると、同じように7.7mm×1対12.7mm×2であり、この時点でも米国が防御に重点を置いていることがわかる。

この3種類の航空機で日米を比較してみると、米国が馬力のわりに速度が低い、いかにすれば防弾装置や防御兵器を多く搭載して、攻撃力を犠牲にしても搭乗員の安全性確保に腐心したといえる。

航空機に関心のある人ならば誰でも異口同音に言うことは日本機はスマートで実に洗練された外形をしているのに対し、米国機は外観の洗練度には欠けるが実用的で頑丈さを感じさせる。これは日本機のエンジンのパワー不足のせいだけではないようである。実際、戦争後期に配備された「天山」にしる「彗星」にしるそのライバルの米軍機とほぼ同馬力のエンジンを積んでいる。アングロ・サクソン民族のタフネスさ・したたかさと男性ですら菊作りをする日本民族の工芸技術の巧みさがそれぞれに現れていると言えそうである。日本の城が装飾的要素が多いのに対しヨーロッパの城がまるで要塞のようであるように。その違いが次の艦船にも現れてくる。

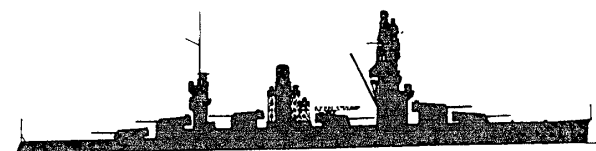
b. その2—艦船

代表的なものとして、戦艦・航空母艦・巡洋艦 (重

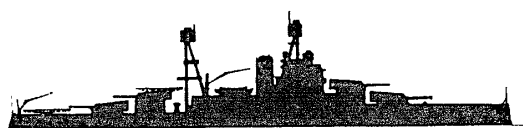
巡洋艦)を取り上げてみる。

まず戦艦についてはNAVAL HOLIDAY明けと、それ以前のものを1組ずつ取り上げる。

最初に最も日本の扶桑型と最もアメリカ的なアリゾナ型を比較すると、



扶桑(同型艦山城)



アリゾナ(同型艦ペンシルバニア)

	扶 桑	アリゾナ
全 長	205.1m	185.3m
幅*	28.7m	29.6m
馬 力	40,000HP	34,000HP
速 力	23ノット	21ノット
主 砲	36cm×2×6	36cm×3×4

幅* 艦の最大幅(以下同じ)

排水量は両者ともほぼ同じ

上記のようになり、米国戦艦の「低速重防」がわかふ。艦型図と表の主砲の欄から日本の戦艦が2連装で6つの砲塔に36cm砲を配したのに対し、米国のそれは3連装で4砲塔とコンパクトにまとめられ、それが艦長を短くでき、装甲防禦部分を短くすることができた。攻撃だけの面からみれば、砲塔を多くし、速力があつたほうが有利であるが、その分居住性も悪くなり、防禦力も落ちてしまう。

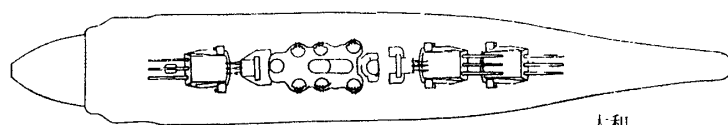
次に大和型、サウス・ダコタ型、ミズーリ型を比較してみると、

	大 和	サウス・ダコタ	ミズーリ
全長	263.0m	207.5m	270.8m
幅	38.9m	32.9m	33.0m
馬力	150,000HP	130,000HP	212,000HP
速力	27ノット	27ノット	33ノット
主砲	46cm×9	40cm×9	40cm×9

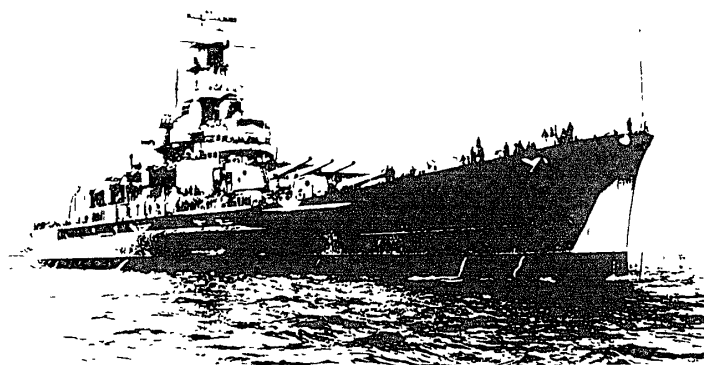
なお排水量は大和型が65,000トンであるのに対しサウス・ダコタ型は35,000トン、そしてミズーリ型は45,000トンとかなりの差はある。

大和型が攻撃力はもとより防禦力も米国の戦艦より優れているといわれ、最近流行のIF-シリーズではその活躍の場面が描かれている。しかし主砲の攻撃力は認めるとしても、日本の光学測定器による射撃と米国のレーダー射撃の優劣の問題もあるし、さらには、2番砲塔と3番砲塔の直後にある15.5cm3連装副砲塔に敵の巨弾が落下してきたら薄い装甲を容易に打ち抜かれてしまう点もある。また、舷窓がとってあるのも18インチのアーマーによる防禦力を相殺してしまっている。

サウス・ダコタはまさにアング・サクソン民族の精神が具現されている艦といつてよく、艦長を思い切って切り詰め、舷窓も全て廃止して徹底した集中防禦の思想がみられる。下記の写真からわかるように、船体中央に、こちらも18インチの水線装甲帯が装着され、艦橋構造物も極力中央に集められている。



大和



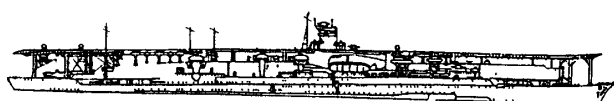
サウス・ダコタ

次に航空母艦(空母)をとりあげてみる。その黎明期に完成した「赤城」と「レキシントン」、そして本格的正規空母として設計された「飛龍」と「ホーネット」を比較してみると、

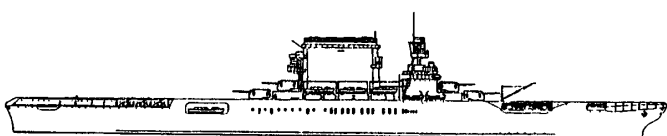
	赤 城	レキシントン
全 長	260m	270m
幅	29m	32m
馬 力	133,000HP	180,000HP
速 力	31.2ノット	33.3ノット
搭載機数	66機	90機

両者ともワシントン会議の結果、巡洋戦艦から空母に改造を余儀なくされたものであるが、満載排水量では4万トン前後でありほぼ同じ大きさである。しかし下記の艦型図からわかるように、煙突の位置が全く異なっている。レキシントンが艦橋の後に巨大な煙突を直立させたのに対し、赤城のそれは、以後の日本空母が踏襲するように舷側に取り付けられ、熱煙を海水と混ぜ合わせて温度を下げてから排煙をしている。じつに凝った方式であり、日本人のメンタリティーに合っている。発着艦する艦載機に気流の流れが影響しないようにとのことであるが、防禦の面から考えるとダメージを受け艦が傾斜したときには煙突が海水に漬かってしまう。また煙路付近とそれより後部の居住性は著しく悪くなり、乗組員の士気にも影響があったからであろう。

さらに悪いことにはせっかく苦心して考え出した舷側に取り付けた煙突からの排煙によって気流の乱れが生じ、それは予想以上に激しかったとのこと。単純に艦上に煙突を直立させた米国の方式が“Simplicity is best”を具現しているといえる。



赤城



レキシントン

● 両者の決定的な相違はほぼ同じクラスの空母であるのに搭載機数に大きな開きがあることである。これは空母の性能だけでなく、先に述べたそこに搭載される航空機の性能の差でもある。零戦が中途半端な主翼の折りたたみ方しかできないのに対し、グラマンはF4FもF6Fも完璧な形で主翼が折りたたみ、さらに、機体の強度の差から甲板上に露天係留ができなかった零戦とできたグラマン戦闘機の違いも大きいのであるが。

次に「飛龍」と「ホーネット」を比較すると、

	飛 龍	ホーネット
全 長	222m	248m
幅	21m	25m
馬 力	153,000	120,000
速 力	34.6ノット	33.0ノット
搭載機数	56機	80機

両者ともほぼ2万トン前後の最初から本格的空母として設計がなされ、日米がその技術の全て傾けたものであり、ここにも両者の発想の違いが見られる。

米国の空母の格納庫がオープン・ハンガー方式であるのに対し日本の空母のそれはクローズド・ハンガー方式になっている。米国の空母が格納庫を1段方式としたのに対し、ここでも日本の空母は2段方式として格納庫の一部が船体の中に入れてしまっている。搭載機数を増やそうとの考えからであろうが、やや凝り過ぎであって、格納庫の中で爆発が起これば、艦全体にダメージが及んでしまう。ミッドウェーでの日本の4空母やマリアナ沖での大鳳など、大型空母がほんのわずかの被害で沈没してしまっている。一方、ヨークタウンは珊瑚海海戦でダメージをうけてもオープン・ハンガーであったため爆風を外へ逃がすことができ、被害も少なく、応急修理ですぐに次のミッドウェー海戦に間に合い、その勝利に大いに貢献している。

● 実に米空母は日本のそれに比べてタフであった。中盤以降は正規空母で沈没したものは全くないという驚くべき記録を残している。ダメージ・コントロールの機能がすばらしいといえそうだが、艦そのものよりもそれを扱う人手についてみると米国の空母には日本よりも多くの乗組員がいる。

赤城：レキシントン＝2000人：2800人

飛龍：ホーネット＝1100人：2200人

● ほぼ同じ排水量でも乗組員の数はかなり違う。現在でも米空母は他国に比べ乗組員が多いが、ダメージを受けた時の応急処理は人力に頼らざるをえない面を米軍が重視していることをあらわしている。これは航空機に十分な防弾装置をほどこし、さらには撃墜されて海上にいる搭乗員を飛行艇と潜水艦による救助活動で守り、それが戦局を大きく左右したのと同じ発想による。いくらハードウェアが充実していてもそれを使いこなすノウハウがよくわかっていなければ成果はあげられない。

最後に重巡洋艦（重巡）をとりあげると、戦艦と空母が制限を受けたのに加えてロンドン会議によって巡

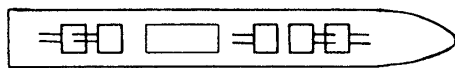
洋艦にも制限が設けられ、1万トン、主砲は8インチ以内とされた。それを1つとりあげてみる。日本の妙高型と米国のペンサコラ型を比較してみると、

	妙 高	ペンサコラ
馬 力	130,000HP	107,000HP
速 力	35.5ノット	32.7ノット
備 砲	20cm×10	20cm×10
発射管	61cm×16	53cm×6
水 偵	2(カタパルト×1)	4(カタパルト×2)

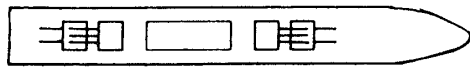
注：発射管＝魚雷発射管 水偵＝水上偵察機

上記の表から、日本が魚雷を重視し、米国の水偵を多く搭載して、偵察に重きを置いていることがわかる。さらに、その後日本があくまでも魚雷を重視し搭載し続けたのに対し、米国はこの条約型巡洋艦の第1艦からさえも発射管を撤去し始める。確かにこの魚雷はスラバヤ沖海戦などではその威力を発揮しているが、ミッドウェー海戦では、偵察軽視により取り返しのつかない状況になってしまっている。いつまでも魚雷の搭載に執着したのは、敵に肉薄でき大型魚雷を敵の大型艦に打ち込むチャンスがあればという、攻撃一点張りの甘い発想に基づいているようではない。

さらに20cm 砲の搭載の仕方でも、妙高は2連装5砲塔であるのに対し、ペンサコラは2連装2砲塔と3連装2砲塔にして妙高よりも1砲塔少ない。これは居住性の向上に貢献しているはずである。



妙高



ペンサコラ

c. ハードウェアの面からうかがえることは、日本が菊作りでみせる工芸的なかなり凝った手法をとるのに対し、米国はパワーで押し切り、実用一点張りで臨んだといえる。とくに日本は航空機によくみられるが細部に凝りすぎ余裕をなくした設計により、その後の改装が思うにまかせず苦戦を強いられた。

3. 作戦にみられる日米の発想の差

代表的な海戦として、ハワイ海戦（真珠湾奇襲）、珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦、マリアナ沖海戦（あ号作戦）をとりあげることとする。

a. ハワイ海戦

外交官の不手際により最後通牒を開戦前に渡せなかったために卑怯な不意打ちということになり“Remember Pearl Harbor”という敵愾心を全米国民に与えてしまい、ローズベルトの対日戦略に貢献してしまったようである。また、ローズベルトは日本軍の来襲を知っていて、何ら対策を講じないで攻撃されるがままにしておいたという説の可否云々は除外して、作戦経過のみ追うことにする。

乾坤一擲、開戦劈頭に日本海軍の航空艦隊のほぼ全力を投入して行ったのであるが、その割りには第1次第2次の2回の攻撃に終わり徹底を欠いた。石油の貯蔵施設や艦艇の修理施設はそのままにされた。攻撃時に湾内に空母が不在であり、何時にその艦載機に襲撃されるかもわからないという恐れがあったからとのことであるが、一か八かの奇襲を行ったのであるから多少の被害は覚悟して戦果を拡大すべきという批判が戦後なされている。

日本の武士道にみられる居合斬りの精神で勝負が終わればあっさりその場を離れる、指揮官の資質の問題とか少ない艦艇を大切に損傷なく無事に返したいという考え等いろいろあるが、当初の目的である米国太平洋艦隊を完膚なきまでにたたきつぶすという目的からは離れてしまったようである。

b. 珊瑚海海戦

米豪を遮断してその後の作戦を有利にすすめるためにポートモレスビーを攻略すべく日本軍が作戦を起こし、これを迎え撃つ米国との間に生じた海戦であるが、結果は米海軍の大型空母「レキシントン」が沈没「ヨークタウン」が損傷したのに対し日本海軍は軽空母「祥鳳」が沈没。しかし日本軍のポートモレスビー攻略は失敗したので、“戦略的には米軍の勝利、戦術的には日本軍の勝利”といわれているが126機中93機も喪失してしまっていて、航空機の生産力の低い日本にとってはとても勝利とはいえない。輪型陣と強力な対空砲火に攻撃隊の航空機が撃墜され被害が増えたのである。どの海戦でもそうであるが、いつも日本の航空機の損失率は高い。防弾装置の不十分さがその原因になっている。

c. ミッドウェー海戦

ドクリットル隊の東京初空襲を許してしまった日本軍がミッドウェー島を攻撃し、あわせてその近海にいる米空母を誘い出し一気に撃滅しようとする虫のいい作戦であったが、結果は誰でも知っているように日本海軍の惨敗に終わった。ミッドウェー島を攻撃し、そこへ出てくる米空母を叩く本来の目的を忘れ、さらに

第2次攻撃隊を準備しているところを急襲されて大型空母3隻が被弾沈没してしまった。索敵の不十分さ不運が重なったことなどいろいろ敗因が指摘されている。ただ、真珠湾の方は攻撃に徹底を欠き、こちらは途中から目標変更的なことをして痛い目にあっている。

また対空砲火力の差は先の珊瑚海でみられたが、その後全く改善がみられず4空母がほぼ同じ位置にいてまとめて攻撃を受けてしまった。それよりも大和・武蔵以下強力な火力を有する主力部隊が機動部隊のはるか後方にいて全く意味のない動きをしているのは不可解である。強力な戦艦群の対空砲火力があり強力な輪形陣を組んでいれば空母が守りきれたかもしれない。米国が真珠湾の反省から早くから空母中心の機動部隊を編成しそれを海軍の中心に据えたのに対し、日本海軍はまだ戦艦(群)を決戦兵器と考え、「大切」に扱おうとしている考えがうかがえそうである。

d. マリアナ沖海戦(「あ」号作戦)

連合軍のマリアナ攻略計画に対し、日本海軍が総力を挙げて戦った最後の機動部隊どうしの戦いであったが、またしても惨敗に終わり、日本海軍の機動部隊が事実上壊滅した海戦である。一方的な米軍の勝利であり「マリアナの七面鳥狩り」という侮蔑的な名称まで与えられてしまった。

もちろん物量の差はあり、正規空母の数だけ比較しても、日本側が3隻に対し、米国側は新造エセックス型空母も含めて7隻、参加航空機も1:2の割合になっている。この海戦は日本海軍にしては珍しく「日本海軍でもっとも有能な提督」とモリソン氏が言っている小決治三郎中将で航空戦をよく知っていた人が全軍を統率していた。それにしては余りにも一方的なスコアになってしまった。

搭乗員の練度、航空機の性能なども影響したはずだが、中将が自信をもって行った「アウトレンジ戦法」を一つとりあげても状況を自分に都合のいいように解釈しているきらいがある。つまり日本海軍の航空機の方が米海軍の航空機よりも航続力があるので、日本の偵察機が発見した米艦隊を、米軍機の届かないところから攻撃をかければ、一方的に米艦隊を叩けるという発想である。しかし、米軍にはレーダーがあり、日本機の来襲などすぐに探知していることも十分考えられたのではないだろうか。見通しが甘かったと言われてもしかたがない。さらに強力な輪形陣と迎撃機、科学の粋を集めたVT信管をつけた高角砲群による弾幕に阻まれ、ほとんど戦果なく70%以上もの航空機を喪失してしまっている。

練度の低いパイロットに1時間以上もの距離を飛ん

で行って攻撃を加えさせることも人間性を無視した作戦であり乗組員が能力を十分に発揮できない一因であったかもしれない。

e. 主な海戦を4つとりあげても、戦いが全て米軍のペースですすめられたことが感じられる。ハワイ作戦はローズベルトの対日戦争に踏み切る世論を作りあげるのに貢献したし、珊瑚海海戦では米豪遮断作戦が頓挫させられるし、ミッドウェーでは運・不運はあるものの機動部隊の主力を潰され、そしてマリアナではそれが完全に壊滅させられた。

確かに、連合軍の準備がととのわないうちは、マレー沖、スラバヤ沖などで一方的な勝ち戦になっているが、ひとたび連合軍、とくに米軍の準備がととのって互角の勝負となると、途端に守勢にまわってしまう。

日本軍の年功序列による司令官の決定のしかた、日本の司令官がそれほど優秀でなくても兵が優秀であるのに対し、米国はどちらかという兵が凡庸であっても、司令官が優秀という、やや乱暴ではあるが、こんな図式が成り立っていて、それは今日の企業や役所の組織にもあてはまりそうである。

さらに撃墜されたパイロットの救出に全力をあげたり、休息を十分に取入れた無理をしない出撃方法、空母の乗組員の多さなど人間を大切にしつつ、人間の持っている能力を十分に活用した米軍に完敗したのは当然であった。日本は航空機が落ちれば搭乗員も死ぬのが当然とされ、パイロットも不十分な訓練のまま全戦へ送り出され、最後には神風特別攻撃(特攻)という愚挙を犯してしまった。

4. 最後に

一昨年に高校二年生の修学旅行で沖縄を訪れ、沖縄戦を、50年の歳月は経ているものの、ある程度は実感できた。悲惨な戦争を強いられた沖縄の人たちの御苦労は大変であったと思う。兵器の劣悪さだけでなく作戦を立てた人たち(多くは青白いインテリの青年将校たちであり、現場を全く知らない人たちであった)の能力不足を、兵も含めて現場(戦場)にいた人々の犠牲でカバーしたことである。

指導者たちの国内・国外の状況把握はどうであったのか。マリアナ沖で機動部隊が全滅し、同時にサイパン島が占領された時点で勝負はあったはず。その後は沖縄戦も含め、ただ一方的に被害を増やすだけであった。指導者たちの無能さの罪は重いといえる。

全体として「人間を大切に」その能力を十分に活用した米国にくらべ、「人間を大切に」しなかった日本は、科学・物量の差はあるというものの、破れて当

然であったといえる。

参考図書

- 廣済堂文庫 副田 護 「太平洋戦争49の謎」
廣済堂文庫 副田 護 「太平洋戦争必勝の極意」
NHK 取材班 ドキュメント太平洋戦争 3
「エレクトロクスが戦いを制す」
講談社 佐藤和正 「太平洋海戦」 1～3
潮書房 「丸」 GRAPHIC QUARTERLY
2 「日本の戦艦」
10 「日本の爆撃機」
12 「日本の空母」
14 「米国の戦闘機」
19 「日本の重巡」
20 「米国の空母」
25 「米国の巡洋艦」
世界の艦船 (平成3年4月号) 「アメリカの空母」
平凡社カラー新書 木村秀政 「世界の軍用機」
原書房 ゴードン・プランケ著・千早正隆訳
「ミッドウェーの奇跡」上・下
角川書店 NHK 取材班 「ドキュメント昭和」
5 オレンジ作戦
朝日ソノラマ 淵田美津雄・奥宮正武 「機動部隊」
朝日ソノラマ 淵田美津雄・奥宮正武
「ミッドウェー」
Purnell's HISTORY OF THE WORLD WARS (Speical)
BATTLE OF THE PACIFIC
Purnell's HISTOUY OF THE WORLD WARS (Speical)
NAVAL AIRCRAFT 1939-1945
光人社 吉田俊雄 「造艦テクノロジーの戦い」
新潮文庫 吉村 昭 「戦艦武蔵」
学研 [歴史群像] 太平洋戦争シリーズ
Vol.1 「奇襲ハワイ作戦」
Vol.3 「勇進インド洋作戦」
Vol.8 「マリアナ沖海戦」